

第237回くらしの植物苑観察会 2018年12月15日(土)

くらしの中のツバキとサザンカ

箱田 直紀(恵泉女学園大学名誉教授 日本ツバキ協会会長)

ツバキの仲間と人とのかかわり

ツバキやサザンカの仲間が多く分布する東南アジア全域でみると、人々の利用の原型は、燃料や道具、建材用などで、それも特定の種類としてではなく、自然の中の雑木のひとつとしての利用に近い。

栽培を伴う意識的な利用としては飲料としてのチャが最も古い。中国雲南省原産のチャ(チャノキ)が中国各地に広がり、朝鮮半島や日本、あるいはインドやスリランカ等での栽培を通じて世界の飲物に発達した歴史は2,000年を超えると考えられている。アジアの各地ではチャ以外にも葉が飲用に使われることがあるが、その多くは飲みものとしての「茶」が広く普及した後の代用品的な利用と思われる。

次いで重要なのが種子から油を搾るため、中国南部や中部では種子から油を搾るために様々な種類のツバキが利用されてきた。その流れの延長線上の日本でも平安時代にはツバキ油を利用し、輸出品としても重要な位置を占めていたとされるから、これにも1,000年を超える歴史がある。

観賞用ツバキの発達

それに較べると観賞花としてのツバキの歴史は短い。ツバキの花が本格的に観賞の対象になったのは、室町時代中期以降の作庭や華道、茶道等の発達と並行したと考えられ、今日見られるような園芸ツバキの発達は江戸時代に入ってからである。

1630年代頃から1700年代前半にかけて、変わり花を集めた「百椿集」や「百椿図」等が次々と描かれるが(図3, 4, 5)、この時期のツバキ趣味は大名や武士、僧侶など、いわゆる当時の上流階級に属する人達を中心であった。

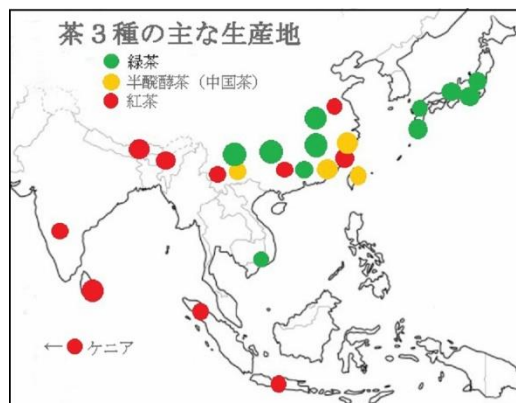


図1 茶の主な生産地



図2 ツバキ油の主な生産地



図3 百椿図巻(根津美術館蔵)より

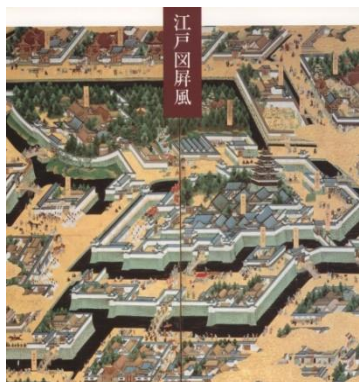


図4 江戸図屏風(本館蔵)



図5 江戸図屏風の御花畠(拡大図)

しかし、その中でも 1700 年前後からは、当時種樹家とよばれた園芸業者が現われ、ツバキ、ツツジ、ボタンなどの変化に富む花々に優雅な名称を添えて生産・販売・譲渡が行なわれ（図 6）、江戸期後半の文化・文政期頃までには栽培や観賞もかなり大衆化した。

観賞樹としてのツバキやサザンカは、庭や公園などの植え込みに使われることが多く、刈込によってよく分枝して樹形が整うサザンカは花が少ない季の生垣にも利用されてきた。（図 7， 8）。

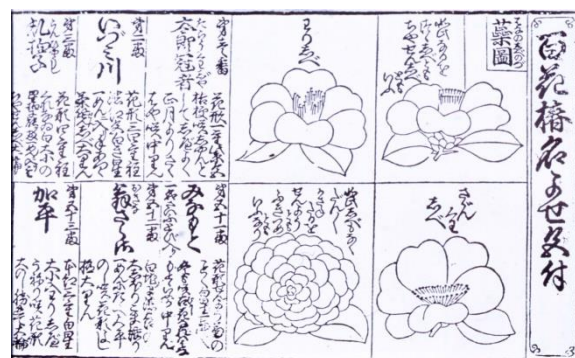


図6 江戸時代中期の椿品種カタログ



図7 生垣のサザンカ



図8 サザンカの植込み

それらの品種は、江戸や京都に留まらず、現在の愛知県稲沢市、大阪府池田市や隣接の宝塚市、福岡県久留米市などの植木産地を介して相互交流から全国に広まり、さらに各地に独特の品種を残しながら、明治期を経て現在にまで引き継がれている。

熊本には江戸時代から、大輪で雄しべが梅の花のように開く独特の品種が次々と生まれ、ヤブツバキの根を台木に使った特殊な盆栽技術が発達した（図 9）。椿盆栽は 1960～80 年代をピークとして、日本ではやや下火になっているが、かえって海外での人気が高い。

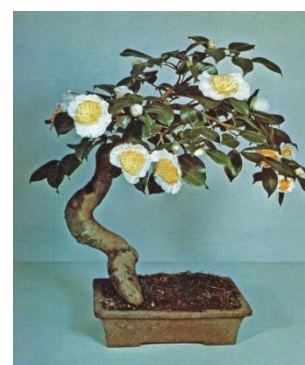


図9 肥後椿の盆栽

.....

次回予告 第238回くらしの植物苑観察会 2019年1月26日（土）

「幕末プロイセン使節団のクリスマスツリー探し～江戸の最初のドイツ風降誕祭～」

福岡 万里子（当館研究部歴史研究系 准教授）

13：30～15：30（予定） 苑内休憩所集合 申込不要